
中途半端な少年の全力ファンタジー

寒桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

中途半端な少年の全力ファンタジー

【Nコード】

N9032Z

【作者名】

寒桜

【あらすじ】

交通事故によって全てを失ってしまった俺はこの世界から別の世界に行くことにした。これは逃げじゃない！ただ魔法とかに興味があるからなんだからね！

ブログ

世界中には少なからず、いま何故ここに自分がいるのかと思う人がいるのかもしれない。

自分がいなくても世界はしっかりと回るし、狂いも迷いも何も生まれない。

だったら今この場で自分がいなくなっても別にいいんじゃないかと考えるのだろうけど、本当に消えたいと実行する奴は更に少ない。家族だっているし、この先の人生に何か起きるかもしれないなんて考えてる人もいるだろう。

本当に絶望したり挫折しないかぎり人は、限りなく前を向いて進んでしまうものだ。

自分が前を向かずとも、おのずと足は勝手に進み、気づかぬ内に成長していく。

それが全力であれ中途半端であれ、人は成長する。

まあ、何が言いたいかというとそんな中途半端な人生を進んでいた俺はある日、絶望に落ちた。

そして、前に進んでいった。

そして、自分がいなくてもいい世界から消えた。

第1話 会話

12月27日。

年末行事のサンタのオッサンがアイスランドに帰国し、初日の出が登場の準備に取り掛かっているなんとも中途半端な日にち。

受験生の俺は自分の身の丈にあった偏差値より若干高い高校の入学試験に向けて、ダラダラとコタツの中で年末番組を見ながらせつせと勉強に励んでいた。

見ている番組は今年放送されていた刑事モノのドラマの再放送であり、犯人と刑事が断崖で対峙していた。ああやっぱミステリーやサスペンスのラストは断崖だよなー森やビルなんて邪道だぜ。なんて考えていると母さんが居間のドアを開き入ってくる。

「逸弥。アンタまたコタツで勉強して、そんなので頭に入るの?」

「きゅーけい、きゅーけい。詰め込みすぎると逆に分からねえんだよ。あでっ!」

「何言ってるのよ。アンタそれさつきも言ってたじゃない」

「ぐおおお……だからって息子の頭を鞆で引っ叩くなって、あ? 鞆?」

よく見れば母さんの格好は前買ったブランドの鞆を手に余所行き
の服を着ていた。

「アンタも準備しなさい。お父さんが町内会の福引で中華店の招待券を当てたんだって。だから皆で食へに行くのよ」

「まじで!? 満干全席っ!」

満干全席ではなかったがそれなりに美味かったエビチリや麻婆豆腐に舌づつみした後、父さんの運転する車の後部座席で外をボーッと眺めていると歩道に誰かが立っていた。

すれ違ったのは一瞬だったがスッポリと被ったフードからチラリと金色の瞳が見えた。外人か？ と似合わず思考にふけていると急に対向のトラックがこっちに突っ込んできた。慌てて父さんがハンドルを回す音と、母さんの悲鳴、そして眩し過ぎるトラックのライト。

二台の車が衝突し中にいた俺はその衝撃で思いっきり窓に頭をぶつけ、

そこで俺は意識を失った。

目を覚ますとそこは何も無い真っ白な部屋だった。
いや、何も無いというのは語弊かもしてない。正しくは靡しかない空間だった。

目の前には一般家庭によくある、外装のない在り来たりな木製の

扉。後は真っ白の俺と扉しかない世界。部屋なんて四方を囲む壁なんて見当たらずに本当に扉しかない。

「……三途の川にしては大胆だな」

「三途の川か、良い例えじゃないか」

突然、後ろから幼いまだ声変わりもしていない子供の声が聞こえた。背丈は大体130前後といったところか、後ろにいたそいつはあの時すれ違ったときに見たフードを頭から被り俺と向き合うように立っていた。

「やあやあ、中途半端なお兄さん。こんにちはに創めまして。そしてこれからどうぞ宜しくもこんばんわ」

「お前あの時の、って中途半端って俺？」

「そうだよ。俺と君以外ここには誰もいないよ、中途半端なお兄さん」

「ここって、お前はここがどんな所か知ってるのか？　っーか中途半端言うな」

「まあ知ってるちゃあ知っているし、分からないと答えれば分からない事だらけの所だね。それより中途半端なお兄さん、君って結構冷静だね。普通なら喚いたり泣いたり叫んだりすると俺の感性では思っよ」

「……別に、ただ死んだって実感がないからシツクリこないんだよな。だから中途半端って言うな」

何なんだこいつは、いきなり出てきて人を中途半端呼ばわりしやがって。確かに俺は今まで勉強も部活も生活も全力でした覚えはねえけど、だからって見ず知らずの子供にそれを言われる筋合いはねえよ。それよりもあー畜生！　やっぱ死んだのかよ俺。まだ15歳のピッチピチだったのに、まだピンク色の高校生活をエンジョイし

てねえのに！　まだ彼女できてねえのに！　まだ童貞なのに！

「まあそりゃあそつだよな。だってお兄さんはまだ死んでないもん」
「……は？」

「おいおい、どうしたんだい。折角君の希望道理に中途半端を消したのにそんな反応しか返せないのかい。やっぱり中途半端だねお兄さんは、はい！　もう中途半端は取り消さないつと。やっぱりお兄さんは中途半端でこそお兄さんだからね」

「おい、ちよつと待てよ……死んでないつてどういうことだよ」
「文字道理に現状道理、中途半端なお兄さんはまだ死んでもいないし生きてもない。まさに生と死の中途半端な中間地点に今いるんだよ」

「じゃ、じゃあ。まだ……生きられんのか？」
「まあそつだね。生きられるといえばこのドアは現実世界に行けるし、死にたいといえば天国にも地獄にも連れて行ってくれるよ」
「どつちなんだよ！？」

あーもう意味が分からねえよコイツも此処も！　何だよ死にたいつて、生きられるんなら生きたいに決まってんじゃねえか！

「さあどつちなんだろうね。それを望むのは君だし、俺は話すだけだし」

「さつぱり理解できねえけど……つまり俺が生きたいつて望めば俺は生きられるんだな？」

子供は頭を縦に振った。

「だったら俺は生かしてもらうぜ。まだ簡単に死にたくないんでな」
これ以上此処にいても更に頭を悩ますだけだ。俺は生きると思い

ながら扉を回す。すると案外軽かったそれは簡単に開き、白い光が開いた扉の隙間から溢れ出して来る。

子供は俺を引き止めようとはしなく、ただ出て行く俺を見ているだけだった。

「うん。まあそうだろうと分かってたしね。それじゃあ中途半端なお兄さん、今度は絶望した時に会おうか」

「は？」

その言葉を聞いた瞬間、また俺は意識が途切れた。最後に見たのはフードの中でニツコリとした小さな口だった。

目を覚ますと真っ白な天井が見えた。

第2話 絶望と希望

あの後、俺が目を覚ましてから二ヶ月が過ぎた。

死んだと思つたあの夜、丁度通りかかったサラリーマンの通報で俺は意識不明の重体のまま病院に運ばれた。両親が事故ですでに死んでいたと聞かされたときはまた意識を失うんじゃないかと思つた。どうやらあの事故はトラックの運転手が居眠り運転をしたのが原因だったらしい。目を覚ました日の三日後、運転手の遺族が俺に頭を下げに来た。運転手も俺の両親と同じく事故で死んだらしい。桜の舞う暖かい日だった。

五ヶ月。

俺が意識を失っていた時間に新年が明け、受験が終わり、新入生や新社員が和気藹々と過ごしていた。

もちろん俺は受験なんて一つも受けていなく、中卒のまま社会に放り出されたことになる。

それまでに俺は寝たきりだった体のリハビリを病院で行える間に何処か働き口がないかと懸命に探し回った。既に他界した両親に親族はいない。文字通りの天涯孤独の俺に高校に行けるだけ金はまああつたが高校にいったとしてもその高校三年間に使い切ってしまう可能性が高い。

そして、結局俺はいい働き口を得られないまま無事に退院するこゝとが出来ちまつたコンチクショ―。

しかもローンを組んでいた我が家は立ち退き、今は駅から一時間のおんぼろマンションだぜコンニャロー―。

何処も不況で手が回らないらしく、今日も就職活動に失敗した。現在75件目。

スーパーで値引きのされた商品を購入し、街頭に照らされた帰り道を歩く。

夏も終わりを告げ、冬の到来を告げる木枯らしが道を通り抜けた。

気分はまさに最悪の絶頂。もう落ちる所がない程までに鬱だった。

「やあ、中途半端のお兄さん。また会えたね」

突然、あの白い所で聞いた声がまた後ろから聞こえた。振り返れば予想通りにフードの子供がいた。街頭に照らされたフードはその光さえも吸い込んでしまいそうなほどに黒く暗い色をしていた。

「お、お前……夢じゃ、なかったのか……」

「夢じゃないさ、現に俺は此処にいるし君もいる。それに帰り様に言ったでしょ『今度は絶望した時に会おうか』って。どう中途半端なお兄さん、今君絶望してる？　してるよね、してるんだからこんな陰鬱な所でトボトボ歩いているんだし」

「うるせえーよガキ。今俺は最高に不機嫌なんだよ殴られたくなかったら消えろ。てめーに会ってから不幸しか起きねえんだ」

「おー恐い。まあまあ聞いてよ中途半端のお兄さん。そんな絶望の貴方にビッグなチャンス！」

「……あ？」

「ここではない世界に行ってみたいと思わない？」

「ッ！　寝言は寝て言えっ、こっちはただでさえ苛立ってるんだよ！」

俺はガキの胸倉を引っつかみ、拳をその見えない顔面にかます。

ミシッと耳障りの悪い音が奏でられ子供が三度地面を跳ねる。

「あ」

やった後に後悔をしたのはいうまでもない。頭に上りきっていた血液は一気に冷め、自分のやらかした最低な行いが嫌でも頭にリピートする。

「お、おい……大丈夫、か……？」

路地に倒れたままピクリともしない子供に慌てて駆け寄り触れようとした瞬間、その姿が霧のように消えた。

「まったくもって短気なんだね中途半端なお兄さんは。まあ仕様が
ないか、うん」

「お、お前……今どうやって」

いつのまにか消えた子供は後ろのポストに腰掛け俺を見下ろして
いた。

「今は消えたかどうかなんて僕とあなたには関係ない。もう一度聞
くよ。こんな世界で何もできないまま一生豚のように怠惰に過す
か。夢と希望のファンタジーに満ち溢れたワクワクドキドキのワン
ダーランドで大冒険をするか」

「行けるのか？ そこに俺が」

馬鹿馬鹿しい。そう思っていたはずなのに自分の口から出た言葉
は真逆の言葉だった。

いや待て待て。俺は一体何を、第一にそんなフィクションみたい
なことがあるもんか。

「行けるよ。嘘でも夢でも偽りでもない現実的に君は行ける」

分からない。

なんでこいつは俺にそんなことをしてくれる。なんでこいつの言
葉に俺は耳を貸しているんだ。こいつとはあの白い部屋と事故のと
き以外

「言っておくけどあの事故は僕が起こしたんじゃないし、僕がいな
くてもあの事故は起きていたよ」

「なっ！？」

こいつなんでまた俺が考えていたこと

「別に僕は心を読んでいるわけじゃないよ。君の顔にそう出てるん
だもん。分かりやすい。んで、どうするの？ 行く？ 行か
ない？ 諦めてグダグダの人生に精を出すかい？」

分かってる。

この子供の言ってることは支離滅裂だし、本当にわけが分からん。
ワクワクドキドキの冒険？ 馬鹿らしい。くだらねえんだよ。ボケ

も休み休み言え。

分かってんだよ。そんな夢物語なんてガキしか信じねえし信じたくねえ。

なのになんでこんなに胸が躍るんだよ！　なんでこいつの言葉を信じなくなるんだよ！

分かってるんだ。自分のことは自分がよく知ってる。

嘘でも夢でも偽りでも騙されているかもしれない　俺は行ってみたい。

こんな世界を抜け出して、こいつが言うその世界に行ってみたい。冒険をしてみたい！　人生を楽しみたい！　夢と希望に満ちた世界で生きてみたいんだ！

「……行く！　行ってみたいんだ！　俺を連れて行ってくれっ！！」

「いいよ。じゃあ行こうか」

あまりにもあつさりとポストからひよい、と降りると子供は手を叩いた。乾燥した夜の空気に音が響き渡り、また静寂が夜を包むと同時に子供の隣に赤と白が入り混じった扉が現れた。

「ああそうそう。未練があるなら今のうちだよ」

未練か……　サクラと八雲に会えなくなるのはちよつと寂しいかな。　それでも俺は、

「……これといってないな」

さあ行くとするか。こいつの言うワクワクドキドキの大冒険とやらに。

「あ、僕は一緒に行かないよ」

「へ？」

まずは序章。ようやく世界が廻る。

彼が動く気がなくても来るべき時には嫌でも彼の周りが彼を動かすんだろっね。まあそれまでは楽しんで貰うとしよう。

世界は廻るんだ。ゆっくりとゆっくりと風のように川のように静かに音もなく。

さて、僕もまた動き始めようか在るべき為に。

第3話 洞窟での談話

赤と白の入り混じった扉を開けるとその先は洞窟だった。ところどころに青く光るロウソクが立て掛けられ、薄暗く洞窟内を照らしていた。子供が俺の前を歩きズンズンと洞窟の中を進んでいく。

「これから君の行く大冒険の世界はファンタジーっぽい魔法の世界ってやつでね、竜とかのモンスターもあふれんばかりいる所だよ」

「魔法ねえ……まあ楽しみにしてるよ」

「ありや？　なんだかさつきより角が取れた話し方じゃないか。それともこれが君のデフォなのか？」

「まあな。さつきはガラになく超奇立っていたんだ。まったく情けない。殴ってしまったてごめんなさい」

「へー、反省してるようだしまあさつき殴ったことは水に流すとして。それで君はその世界で冒険をするのも戦うのもよし。まあ自由にしてくれよ」

「時期が来るまでか？」

「？　なんのことだい？」

「いや何でもない」

「ふふふ、やっぱり君は面白いね。楽しくてワクワクする。大丈夫、魔王と戦えとか世界を救えなんて言わないよ」

「おおー！　そいつはありがたい！」

「うわっわざとらしい」

「どっちがだつ！」

洞窟の中は大人一人がギリギリ入る程度の大きさでもうかれこれ一時間は歩いた。だがまだ出口にはたどり着かない。青かったロウソクの火が次第に緑へと変わる。

「……以外と長いんだな」

「そりゃそうだよ。別世界に移動するんだ国と国を渡るよりも大変

なんだよ。手段も方法も段取りとかが面倒で、このやり方だつて安全を重視した上で確実なものなんだ。少しの不備は目を瞑って貰いたいね」

「そーなのか？」

「……なんだか生返事だね。何か気に触ったかい？」

「俺を異世界に送ろうとする、お前の真意が見えないんだよ。それでなんのメリットがお前に出るの？」

「あーそういうこと。君、結構ストレートに来るね。んゝメリットか、君を送ることが僕にとってのメリットだと言っておこうかな」
「あつそう。じゃあもう聞かない」

「つれないなあ、んじやはい」

子供は振り向くと俺に俺に一着の服を手渡した。黒い上着に青い皮のジャケットと赤黒いゴワゴワとした長ズボンでちょうど俺の背丈にぴつたりと合いそうだ。

「……なんだこれ」

「君の衣装だよ。もしかしてその格好のまま行く気だったのかい？」
今の俺の服装はTシャツにGパンのいたってラフな格好なわけだが異世界ではおそらく異色なのかもしれない。俺は黙って渡された服を渋々着た。恐ろしいことに服は俺の体型にぴつたりと合い着心地はイマイチだが文句はない。

「へえ……なかなかどうして似合ってるじゃないか」

「ありがとよ」

「うんうん。そのなんとも言えない田舎風味が身に染みきつていて何処からどう見ても田舎人だ」

「おっし面貸せ、体育館裏行くぞ」

「まあまあ落ち着いて、コレあげるから」

ポイポイと無造作に短剣と小さな絹袋を投げってくる。絹袋の中を見れば数枚の銀貨と銅貨がキラキラを淡く輝いていた。

「その硬貨は向うのお金。銅貨十枚で銀貨一枚。銀貨十枚で金貨一枚。覚えてくれればいいよ。それで三日ぐらいは持つ筈だから」

「それまでに自分で稼げ、と……でこの短剣は？」

「別に？ ただの普通の剣だけど？」

「えゝここはなんか特殊な力の宿ったゴツツイ剣とか、精霊の封印された選ばれし武器とかじゃないのか？」

「それでいいならあるけど ホントにいる？」

「あるのかよ！？ ……いややっぱいいわ、余計な事に突っ込みそうだし」

別に俺は冒険がしたいわけであって勇者とか選ばれし者とかそんな余計な事に突っ込みたいわけではない！ もうそんな厄介ことは十分に中学で味わった。あーでも売ればそれなりの金になったかなそうかいと子供はやや肩を落とした。……なんでガツカリしてんだ？ 渡したかったのか、渡そうとしてたのか！？

「はいゴールー！」

立ち止まった場所の横には洞窟には似合わない真っ白い穴が続いていた。ここが入り口なのだろうか。

「ここからは君一人で行ってもらうよ。僕は行けないからね」

「そうか。悪かったな何かと」

穴に向かって歩き出そうとして足を止めた。そういえば碌な挨拶もしないままここまで来ていた。

……まあ、最後とはいえ礼儀はするもんだよな。

「俺は比向逸弥^{ひむかいいつや}。今までありがとう、さようなら」

「あはっ！ 最後に自己紹介かよ。うーん僕はそうだなクラウンと名乗っておこう。こちらこそありがとう、そしてさようなら」

ブンブンと手を振ってくるクラウンに手を振り返しながら俺は穴の中を進む。

結局アイツが何なのかは最後まで分からなかった。でも悪い奴じやなかった。

「あーそうそう。今度は死んだら会おうね逸弥君。次に会える日を楽しみにしてるよ」

前言追加。悪い奴じゃないが嫌な奴だった。

進んだ先は白い洞窟というよりも白い空間と言った方が合うのかもしれない。後ろを振り向いてもある筈のクラウンと歩いた薄暗い洞窟の存在はもはやなかった。

足を進めてはいるが、前に進んでいるのかどうかもあやふやな状態。右か左かに偏っているのかさえも不明。どうにもこういったものは不安を掻き立てられる。

もしかしたらクラウンの言っていたことは全て嘘で、既に俺は死んでいるのかもしれないなんて馬鹿なことまで浮かんでくる。

丁度その瞬間だった。

目が白に慣れて来た途端、赤光が襲ってきた。目の奥を激痛が駆け上がり脳髄を掻き舐めた。

「ぐがああああああああ！」

痛い痛い痛い痛い！目に、目が、目を、目！あ、これってムスカぽいかも！でも痛いマジで痛い！死ぬこれ絶対死んだ！俺死んだ！じゃあクラウンと再会！？感動の別れから数分後まさかの再会、それすっごく気まずい気まずすぎる！絶対白い目で見られる！今俺痛くて見えないけど！

蹲り、あー俺って結構余裕があるのかなんて考えながら痛みが引くのを待つ。

一分間だったのか一時間だったのか、痛みでどのくらい経ったのか憶測も立てられないまま起き上がると、

「え……」

目を開けばそこは森の中だった。歪に曲がった見たこともない木や色とりどりの昆虫。クラウンの言った通りで、俺は本当に異世界とやらに来たようだ。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアア！……」

だって異世界じゃなかったら、目の前にいる見たことのない猛獣の説明がつかないもん。

「ぎゃあああああああああああ!!?」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9032z/>

中途半端な少年の全力ファンタジー

2011年12月31日23時48分発行